相生玉手箱

庭鶴著　五冊　完

へ遠 3
1859

遠入門 1869 巻

平野屋 御本所

武藤 松本文明堂

山傳

序

夫釈尊滅後の教へ天竺漢土頭陀。長坂集溺
最門。孫弟子人皆真同影なり。世間種
々人命を頼りて。
決こゝろと又多くの生人命を頼りて。
仏教弘寺くすべき醫師。賣買の利欲
こ耽る。出家と親ぶべき僧侶。新嬢に遠
少欲之徒弘遠法ゆゑ。大切よりの。新仏と

第一にすべき百姓の細工捕手
業術より外に無を奪ひ盗て。死活の境り
目を考へ。右賣買の賣に精力を尽
べきこと。所詮こゝに踏ると樂しむ此新造
生業の美端にて。はか無民に成まく
と理は同じ物也。然先祖より伝る生業
を変ハ元美端の志しきものの也。故に肥後

の国阿蘇の文殊神を友成ゞ商友に進と
いふの生得神藏乃業に烟ひ。醫り志
しく。学問に成あ。皇都。治遠へ訪んとして。
撞別言ふまく。まゝ。扇く。焼よ。高活しく。
業に変る此美員と。此美留と覓し
ぶる乃教成字世の新造
年ゝく。尾上此種乃
ゝく。芸術に筆記して。玉を第

に納め。氣味ふへの古屋にて。松葉の上に置
をを探索のごとく永く神藏と勅命し初代。
寛日乃神の使者にいち世話とうけ。竈の神
又行に准へ。又ハ此事物くるとき出うり

安永二甲午歳　　英作漢山沖雲堂
　　重奏吉日　　池田遊鶴

御藏

和生玉手箱目録

書こ書

第一　氣味乃前遂

第二　言物出今

書こ二

第三　鹽戸の神議

第四　醫道原源起

第五　丹溪の執心
第六　夏紀の淫婦

まくらこと

第七　世界の威勢
第八　義士農商
第九　荒子の理屈
第十　後妻の制法

まくらこと

第十一　治宝の辯舌
第十二　宮酒の名誉
第十三　孤松の芽生
第十四　蘿蔔の述懐
第十五　梅干の感慨

まくらこと

第六　玉川の精霊

第七　租稅奥地編

第八　松根の艤別

同孫絵

宮城県図書館蔵

第一　流はふのそなたこ

今とてはめ松根衣〳〵日も暮まで久しき。神を

為家出るハ九月松根の日。弘藤乃文ハ神を友藏ふる

三十代ゆりの後流いまゝ安して友くをとゝ立づけ。

生年十八家なり。世〳〵神業と事〳〵て。明神ふ仕へ

まつる。法人の行形よ丹波とめさんて。子孫のうんじ

者葦原ハ夢るゝ。家門と安國止平今久納ゆ

るゝ。仏友こ進よいろうすゝ物と見へてこう。一子

ゝ神藏の業と力〳〵ゝらひ。鶴ロの嘉こ年を

ふさぐ神あり。祖父の書よ様とおこし一巻うれ神なのか。こ
様の様一つをとりつゝ。ちんと石つゝひの下女を
うばいとも相よにゆびるくとそをとうまるをとこゝひ。藏と
おくゝハ為に仙て無ゝゝそ山辛ちくそくひ赦をもづ
ゝ押ゝるゝ。ゆくゝて生得醫乃よ志保くゝ子たの
河のあそひゝも。ゆと。蓋よ入て常住者をとれさど。紙を
こまゝふ切て調合ゆまゝ。と事ゝ。出孤藏よ小さ和口を
さ。拭をびの茶茶ゆこゝら入。乳母よ瓦とゝげさせ根
拭とゝ。せてアゝゝうぢゝまるる紙ゝ。えゝうゝ大海日まで
祖父祖母あ親の孫とゝうぢゝふとあそひゝゝる日。七八家にゝし

ゝ。ひてゝ。ひとけゝ。ゆ。茶遠のゝ。吳人てゝゝ。ゝ牧医の
仁術かる事とゝていよく。牧んゝくゝ。大成海と求
出て一つゝよ前とゝくゝけ。遍く七級の書代乃重ゝ。
又脈法をゝくゝ。ゝひて。ゆ合ゝし。先サスノミコゝいふ
也とアるゝうゝとゝ人のゝうけ也ゝ。そ也ゝ。ゝやゝミコゝと
いゝ。ゝゝ家に入ゝあくゝまゝ。孫海ゝいろくゝと。夏
をゝくゝ。茶の買金をゝて凡ゝゝゝ調合ゝて。
家内の老ハ勿論。出入の男女ゝいるゝそちゝくゝ。ゝ
みと。ゝて。ゝ言ゝひゝゝもゝけ也ゝ。毎夜。加茂連とのんゝ。
かる新月ゝてゝゝもゝ。ゝゝゝき。祖父祖母ハゝゝ。

父武兵衛婦ゆくゑあるべきなげさ。かゝる兄弟ともあるべき所
神祇と徳びき方ほうく。一あの者どたのそいろ〳〵こゝを見
をくり人々まだ一ゝうよりうるれ年ゝ風の寒。秋いまゝ
ゝるとみをいまゝと親もとてゝこゝまで月と見とゝうけるゞ。
つよく医の志切よりあて。どそも異さて学問とゝ精
ゝるゝ元醫とかゝる事ハうるつまゞ。るゝ此花の浦。
又押照や紅波とゝゝんハ雲もの比て何ゝ名醫取
多あるゝ学ゝ学ゝ。ゝとそ彼比ゝ彩き学ゝ代ゝゝげまゞ
とゝひ立ゝゝゝ。見ゝゝ見ゝゝるゝゝるゝゝ新な
きゞ所ゝけゝものゝとゝゝゝ。我新ゝ学と

こゝゝゝ一色の事ゝゝゝゝゝゝゝゝ。下男一人ゝ藤の測度を
ゝるけゝゝ。我すゝ前とゝ枕ゝゝ立出ゝく追ゝゝゝゝや
ゝゝんゝ。道ゝゝゝゝいゝゝく外ゝ行ゝ程も高ゝ
ゝゝゝ。ゝゝゝ追ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ一記ゝ
ゝゝゝゝ新ゝ内の若ゝ細得ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ義付。ゝゝゝ前ゝゝゝゝゝゝゝゝ先祖の支度ゝゝゝ
流ゝ我いまゝ新ゝゝんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
上京ハ医ゝ学んで生業ゝ。ゝゝの八を新ゝゝゝ
ゝ会ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

阿蔭の文は
神主友成の屋敷
友実一ふ友と進
神祇と踏と
醫師にも
友釈さぬぐ
矢見を
加

まさるる發明者くんぐ自慢くいうちにも古へ
和歌をのぶるたる石碑の新るまでの。山家へ風流人て陸海と
上京をべくして。赤間が関を祝もるく安藝の國廣島湾了
英神の嶽ふかい婦ひるぐ名ゐるき嚴島の明神るまべ乃年
安樂の祈願かくぐ主後もふ系清し。陸を新ぐだうり
うてきくに年まり。境内をるぐあ者ふ後ハ三る山嶽とし
て島帽子を立すべるぐく。おハ淋くう海水吉都に
まびひ。五ハ地太ハ松原すり。南少ハ三十三乃東西八武十八乃北
巴廊上目をおどろく。足湯うる石ハ又十町あまりもや
あんとおりき自然おくしも汐のうち来りて彼巴廊乃

板葺の下までたくさんべきを明系給るよ扶ゆ。を方うう
ひてくべきさるれ拍なるべくと用だるく和ぐめ。まら尾乃
よりうと河伏免の新美系清せ上に海の中へびたくしく
実出くる石垣の上に立せ寺ハ。京の東山清水の舞台ろ
ハ京れ新よハ金閣ひてとぶのもあるとや寺うえるまどと。
山新寺の舞台ハ新でも忍大海ま落入て西東毒地の
板のはとのさするやうるひちひやと西ハ海ひ山ぶるひ。
頼の祇園へまろ。それるを福禅ちに清めまで。を京西いえんと
ろく。西ハ九州の北玄に連ろ。南ハ四国の山く海まうろひ。
寺の結構河ものべでく。南くや新紀人東乃の玄毎ひち

よ。私とぐめ風流と貴駕して。日本第一の絵師なりとく
聞にとくひそ〳〵して絵の師とんど軽く賤し。歌詠の者
て恨うけ私のうらく華人など吉つくとうしやるなめ。
志し日本の所色をを九年が一色ぐ絵師するのくにて
法師と教ふる所の名所四辺。松島亀沼天の橋立などの絵
京と云美よ見てる事もるくして。此寺どう日本第一と云
色色人の吉色ちびと色一つで第のを見て。他の下男八郎
をいとゝび新なまぐく志今絵。吉絵の中山第にせし絵名川
の書ることみるく美しし年前の画逢彩大絵を絵紀と
あくく美して新しるる本此別面を絵ぐくにて。

絵巻の第二を赤色ぐく描摩ようけるが。先祖の反成へ
計色まで書又ふれ序るべとて言ふれ松を一見あり。
尉と姥と出今して松の中来の老松ぐう。別言ふれとひ
ふ千載の今に残りて天下一統と下万民祝云の例と
むくく松をべ踏こ入てと京せんないぐ所を。立ぐくみを
一見せ第美明の美所と見ないくく西条川を赤
ふくう。毛日八姫ふとぐう兵衛者とつをとぐ中をけ

○第二　言ふれ此あ今

厩戸の皇子の第絵しまと稽摩と計の間と
書き人で。まむし京行天皇の二年とや描書稿日乃

大郎姫を皇后とす。まひて。日本武尊を生しまつる。大和の
ゐなかに出でまして。大和十四郡四方三日まで大上宮にして武家
の家をつくりひ。又穀倉の北とうや。姫路に一宮の斎殿
みて高倉形とあるそのあるいは整昌の板ひ藤芳ゐ〻に一尺し。
それより三ゐ砂に結き尾上の松乃かなて結せし吸角代に
出り。主従二人さいろかさ人行ろかとよきげんよ所てつくと
ゐゐ乃ゐるにまこに東宮嘉とうへゐ〻んと足ゐ乃松ゐ結る蓼
々結そして十八ゐ代まそ保ひ。照らるる乃日よろひ〻年の
ゐゐもに満るる結。書盤盤の文書今にろゐ〻ゐ秋
井子代足筆と通ゐけ。漢玄奏の姫皇にハ傳乃面高代

やてちいさん松るたちまちに大本と成。枝ハ猿猴のもとのむ
をゐゐ〻竹田のゐきさけ大ゐ〻ろをして封爵よ形ろ。
本文と号けそめ〻ろ日本うてハ領城の文上の字と
ろう。ゐけて此言砂れ松ハ信吉れ松と勢ろとこめ。たゐひよ
あさうゐ中ゐまゐこそ紀結整紙ハ服の敏よたゐこん
でゐるくの乃をゐ〻と書の秋も面乃夜も竜も雷
こいとひゐく。本結よりて港ゐ流くも火ゐ流ても。一秋
ゐ砂さと西ゐ美〻とやゐ。さあまハ今時大切よ人の
うやまて尾上の鐘を唖ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ〻
のゐ〻にいろて志ゐ〻くやをひゐるれろ。いゐく

ともなく白髪の尉と姥忽然とあらはれたり。平生社
云の庭掃して見へけるが嶋臺の縁か掃にかゝるにぞ。
こまざらへと箒を携へ塵を払ひ清浄の年みようし風
情そ松の木の下に盤植するを掃ふ。友成進みよふ田綾なる
あやしみ老人夫婦なるべし定めて狐狸のたぐひなるべし。
其上来りて対面せし友成が由緒なる事をおしそろ
て出現せしならば。此方より名乗かけて尋ぬる
ともなほよと袖ちうて立寄。且今あらはれたるは
神職をするに。古九州肥後の国よりまかりし阿蘇乃
宮の神主友成に対面して由緒あらし言る所み

尉と姥にまみらせまふか。かく申を聞して老夫婦か
来縁友成を申者なるが。此度上方歴遊の序
先祖のよしみを思ひ続けなるさ尾上の松一見の為
此所へ来りたると。又もそも何を其名ひさん老夫婦は其来
隠系し。高砂にて見えてこゝ所の能を見てふか
二人のおかけまハ一セイかサし上ぐるなど此頃あつらく
言ふしたる紫内なるに嘆松ひ一つもせずして不可意の
法あいがとあげなし。是らしめつらし対面のあげ文を
後世までも名とのことを付合なるまで何角は物語とも承
なしとやなれ。老人完尓として申さく。いかにも此方にも

友こを先祖友成の例よ
まさせ橋及こうる彼の浦と
一見せしにかりうどを
射こめよ出会
我ろこうる鹿を
ゆぐこうろ

老婆
帰
待よ
待
友こをよ
こうぐ
矢ろ

美人あり。こゝに先祖友成上京の帰り山更に立ちよる。
翁と夫婦出迎へてさまざまの物がたりの人は厨に居りて
ほのぼの住吉へ行て待うけ。こゝかや山浦永き帆とゆげて
沖を過て来るまゝ。ゆゑ。海辺の吸物よハ久敷世に比ぶべ
ら秋の数の物をそろへて天遥堂の大宴を開く。
我れ久しくも久しくなるあうれしし。を始て山家を
席をかゞり松一足毒物をまなびし。古の友成ハ遠う
上方一流の席をうつし。今宴席の上京ハ外よ一大
夏の日をあつてひと立まつる。ふるさとの
夫婦よ物がたりをみて志うるべし。ゆるゆるとハ乃どなぐ

美人をもてなす。はる友成の末孫うまれ出たるやうに
志のづくしとざくあらうれ。歳とせてる浦白髪。風
をうゝひ雪ゆの松の美ハ枝は氏物語。列仙傳より載る
数くの仙人をと遠町まで。ろうの人れ夫婦。いう仙神
通をとゝ。一方意ハ深ぶ。甲斐あ。と星とう
きて友ををたづく。強弱てあうけるゞ。滋子也より
徒ふく義本入らどの梅花神易。うる足毒は一岩威
をうふあもうあう。今いかとうつゝ中べさ。亦神祇のあ
よ生しるゞ。初かの時ふを一を業をとゝ。姫。中尾殺
一つ仙人ゆうゞ只醫乃のゆの。執心。こたの時の楚び

るゝも薬の調合切刻み烏帽子狩衣掛をすて。醫師のまね
して小招掛通の事犯一家一門見とまれど。京風の學
賤しき事と七八振ても貴人まゝ近くも用ゐられて
醫学を勤むるを諸人の偏仰是求す。何ぞ京都大坂
まの沢まさき名醫のことにく豪傑の師を求て学
するとぞ学問し。更に帰りて一處の名医と成べき事なる。
汚も耐と嬉の神通に見ぬるハさまりとりの耳にあけ給
るたしかなり。扨学問に力を盡す所ハ我大和の一人會力。
虚去の積藥ハ誰と授まさして諸しみぶりと学く。紙へ
業性能毒まて見ぬるゝ胤の肉と燒て気寝月に和し。

嘴に點じて眠もじ。東湖が営とあ川の孫康が雪とつゝ
しるゝゆるを燈心とおそくしく入ことる火とかげせ
書をよむべし。京大坂に遊務の為。数くの更里芝居を
を見つ金銭あまさびしく安れ。それど学問急まじ。
ましに神佛はまるとも。あまりあまり夫婦は仍く。何とぞ
業が全座と推重あつ。京は後学問のをしも皆に出藩
しまるべしともかれ大幸なんと奥理もなく物語る

當世下手談義巻之一終

武藤 松本文庫堂

お生玉の御宮さし二

第三　豊戸乃神議

熊遂文中方ヨ車遂ニ為雄辯ヲ遂ト、ものを
と仰つしとハるかゝり。友ニ進ヲ仰ぶ所さゞんをれを
口上立流ヨ方の上を拙ごゝをけまべいふを五拍ヲ手
きんと相ゝせし兎ゝ屋とゝ印。ちよぞんのごとゝ
一ぐゝものこゝばゝちあけてゝ正直ごとゝ神祇ヨ
敬ヨむまゝを人ゝるとゝして感ぞるふあゝゝあゝ。候人ゝ
ゝ洗ヨゝゝど生ゝ生ゝる文ゝ外ヨ宮ヨゝて後きあの
せゝゝきものゝゝ剛強なるものゝゝ素弱なゝ去ゝゝ。

御本所 東華軒

脾胃よわくて人参を好める拙わる。去婦ひわる。法蔵のひハ
生業のよろかるくを好きゝひある事弱常なり。志うをを
又理と事ハ弱き人ハ泥を拾をしでなめる事も堂さう。
さゝひなれゆゑ好物と変ずるゆまゝ弱ゆう拙で
て我魂を我況のゝまゝ色にをるはいとあやまちもお
果せるゝを拾さしにあつ事も出来る拙ゝ我ゝよ我なゝう
志つけゝて世ゝ氏海ゝ沒ゝ我伝ゆゝふゝう
ゝ拙ゝ聖人の刻已後礼て已ゝ我伝ゝ朝ゝ約
礼ゝ後ゝゝ人ゝゆゝ。ゝゝのゝ況をゝゝ云
よゝゝゝゝ見附紙憤の事て。ゝ分の

乃氏志ゝど。亀徳のゝゝゝ前ゝゆ。ゝゝのゝ慶一乃ゝ
ゝゝゝ。ゝ藤ゝ嶽乃氷ゝゝ一生ゝ紙ゝ知ゝ拙。
永ゝ貴況神ゝゝ生をゝけ。能中神徴の家ゝ生ゝ
ゝゆ形ゝゝゝゝゝゝ。柿神ゝゝ
神徴ゝゝゝゝゝゝ。ゝ服絲ゝゝゝゝ
ゝく実世ゝん。雑前人ゝ人ゝ四代元正天皇の御字一不
全人親ゝ。日本紀三十巻を若ゝゝ。始の二巻ゝ神代
巻ゝ号け。先序ゝゝゝが天地冥冥。ゝる拙ハ立のゝて
世界の天井ゝゝ。ゝゝ伝ゝて出ゝるゝく。ゝる拙ゝゝ
て迷のゝゝくの地ゝなゝ。ゝ常立ゝのゝ況ゝゝ況ゝ

天神七代地神五代の神こゝに生あり給ふ。こゝ中に天神乃七代目を伊弉諾伊弉冉尊といふ。この二柱の神あり給ふ。この時山海と姫嶽命といふ。名くに紀し。樹心人中海蓬中尾を初めて陰陽の乃とを伝授す。天のうゑを北にあつて元あゝずの山祝云。まろ像入しどに情胎まり給。海うゝ山うゝ山と海く億波の河と佐度の河と孫うまで産さまひ。こゝ後天照大神月讀尊蛭子素盞嗚と一女三男を産給ふ。扨こゝ後は天照大神素盞嗚尊乃ふたゝびを立給まひ。天乃岩戸よりうゝ人で世界をうちまち青雲乃夜とうゝて皆育人のごくうゝ坂よ

八百万の神達天の安に集て命合あり。伊とぞれの神乃岩戸をおさせ給ふやう。漢八百万まぎきゝ名小前代うゝふけく分別儀を振ひ給人どゝ乃くゝ六の言葉の出くゝそ伊とぞ乃痛をしまひけるパ百万神乃乃痛を治べ乃痛八百万乃神代乃代乃流乃。醤乃そ思葉命一分乃仕出給ひ。岩戸乃まえ乃周をゝ紀表坂樹の枝よ八坂瓊の又百箇所統八咫の鏡。青和幣白和幣をけ表中に押立給ふ。ゆまで纏の始給ふ。まゝ六鈿女命と云る巫神代乃。神乃代奉たまひてあげくゝ祈と乃ゞすゝくゝ立て杖と表にゝ乃乃乃。色をうゝて法

の神を祭りしくの一藝まり。を敷調指る魚をみさ。一ちゑ
さぐんの大さ弘ぬ。おゝちのりろやと天照太神岩戸をか
ゝりさまゝを岩戸のまへよりかくてうり和はるが業掛りの
極付まて立ぢうりてを力雄命岩戸をうて投のけて
はをうて引出まづゝをれば。人の面もろくと見人常
言の秋をめゝふをりしひをとゞせゝぐく。法神をあ法
ゝまうこゝ法ぐんくはる孫ちびうり豊葦原乃未
永く。神の御正統絶せず伝ぐてを牧あまをある神武
ゝるをを出うり人を十六代巻田の天皇の御宇浸ちうり
傳手ゝうり。三十代欽明天皇の御宇佛法ゝうり永く

神乃羽翼ゝて必のたをけくうり。ちか仏のもゝてのか
らぐゝふりゝ。ゆゝうぐゝき神武ゝ生きあゝぐゝ紀神
職の家ゝ生れるぐゝ代の業を勤うんと志すい。家おつゝる
家祝の恐る和ゝうるをすゝ。ゝにいづ主の御ゝくゝ沢
先祖ゝを代ゝつゝる家業を他ゝうゝを大ゝる義不
若ぐゝべき物ゝ。家乃家業をかゝて他乃家業を
つゝもゝるすゝ矣堂のそゝ。ゝつゝまゝあゝれゝぐゝ。ゝゝて一向り
生業をうんとゝうゝ小ちのそゝや志ん得ちびうり。世界
流ゝ死の夢ゝ茄ゝ八ゝ。ゝあゝふ流ハゝ江戸のゝに下ゝ。
学ゝのゝに主学ゝ主のゝ教のゝに学ゝ主たゝ

あるべし。諸生業のつかさ喩て。侍のつかさは侍。百姓のつかさは百姓。
職人のつかさは職人と連ておぼえるべし。喩ばかりなり。
我家より伝る家業成ばかりなり。他の職を学んとすれば
乃夢は茄子とうせ。小角の夢はぼうぶらとなりぬと
ふる名をしるべし。扨又醫道ところどころにのこり
ありて世間に不要用なる事なれば捨らんものなり

第四　醫道乃源起

夫医のおこりとは。日本にてはむかし大己貴命。少彦
名命と志を合せ。病を療むる乃方を定め。今世の医者
といちじるしき初もとすに天竺をめぐりて法人より授した
まうとや。侯て方は今日本につたはる。彼ちなみは伏羲
神農黄帝なるをおこれり。世に望は君にして医なり。
伎伯岐史医は官にして医也。張仲景徐文伯は大守にして
医なり。伊尹扁鵲は聖にして医なり。葛洪董奉は仙にして
医なり。彼中神農氏はくすり草の実木の根を口に入て
嘗てぐすり。先之みづから毒にあたりて能膳をこゝろみて掌た
まひし世の教なり。刑痢の為る草に法草は能毒薬なり
也。そもそも病源は世にしてはは黄帝と伎伯との大問答に
小刀乃花を咲せ。古を書抱よりて内経と号ける。
後宋元明の間乃名医おもひくふ述作せり書抱いかる

憤も行はるゝ之階梯の標木なるべし。祖父なる之世よりんごる医業なるべしと雖ども。理なるに絶の七代の祖人よりゝざしを法人これを皆ゞ。

かげんゝくゝのけゞのかれ命を授るまで動かく

おもきを証を。呂氏の禮記乃注より載たる。候乃まぐれ

灸法ありて宋家濠の法また。一より対灸二より本草之

素問霊枢。じこれ乃理なくゝ究めたるを云。我郷の教

生と以ふべし。之世お傳乃医なるべし。周方ハ薬方乃ことを

もちひ。ゆゑ下を醫ありて死をまぬ病人を救ふ法

へ毎度ありけるに。またり。ゝを云一世の医ゝ

聘君よりなるかゝりしゝ法乃ゞ。又虞廣の雞峰乃

注より素問霊枢草雞峰これを之世の書と号け。心書ゝ

よくつゝしゝるを之世の医ゝ。伏羲神農黄帝の書ことを之

よハ。之世の医ゝ。ゝ。ゝ。續医法よハ李東垣。朱丹溪。滑伯仁など

ゞ以名医皆祖父なるお傳乃医よりずて法く醫術ハ

通し書をあゝ云を立。ほゞ学の指紀ことを立べ書を

もと要として之世お薬よりゝざるゆゑと。ゝて。平

竟契ゝ言いものゞ。ゝ傷のやう海なゝた。今世乃

を指法ゝそ。ゝに。之ケのはをゝゞめ医ゝ而ゝ醫ゝに

ゐるべきを身一世の医いりぐ学かつくてと世のつの人をく
なく。又三代お伝ぬ医ハ他ゑ伝ぬまでとこを名乗ぬ流
つゝく祖父の名をたゝしい犯の名をたづゝて業とこゝゆ
まのあるうるしぐ。三世の医くいふハ祖父をつゝる医と云
又閑雅をあげくたゝるべし

第又　丹溪乃執心

北辰のを所より居て元星のちまをじむふぐごく。曲直ハ田舎
ちもと方よのゞゝと名医よたゝてをひてをゝ氏ならふ書生
多し。青ぬ医師ハ学問をこさゆゆくを天下ぬ廣こ中
ゆいいゆゝ名師やあゝんと。武志流ゆをるゞごく清く

清くまでだつゆすくしゆるこゝろざし。こを道より執ゆぬふゝさ
まををいつゝやうるべし。梅又師より人もこを才ゝ乃志氏
ゝくく足ゞけ一大事をお伝を。黄石公が法ゝと下部
乃格ゝそゝゐゞくとたゆせ上骨を高ゝて心腹を清く。
こを後宮ぬの裏紙を伝ゝ新ひこ抜ゝ書ゆこを人ゝ
あゝずんゞつゝる事ゆゝしくの多人ゝ。朱丹溪の羅大元ぬ
足ゝんゆを教ゝ一ゝと一意や二意ゝくいけがゝゞ。
ゐゐゞく流ゝらまゝう。羅大元のつゆぬ大ゆをゝるに乳乃
ゝまゝくゝるゆ氏ゝのゞゝて大井門の立流ゞもゝれゝハゞゞ
まちゝべき。妻ゝ人、孫より人ゝ師匠をゝゝ一ゝぬ。

ぢふあるめ病ひて。紙のごとにあるまで氷と化して流涎門およ踊躍して死にたれども絶えず一度も對面せざる。板まの種をまきてむすくくとまつてゐる中紫色なるもの。ふとかりし海藻の海苔男が小堂の小所の燈籠のようくとつまつて生れ榻ようむるあり海ふさもみるも。ほまどかれを九十九枝まぐ毒ひつめたつて一枝を行るとて車中にて注生しあるしをまゐ世ようでうまこう。丹溪ハちまに及しかる切うる志ひでけらまーとうまでもび入て師弟れ絶を居。丸いそだうる事なるまべ冷酒そ注ろ。豆をえろ。学術悪くうぶけつくして。醫ひの裏義海金砂乃一粒ずつも行きを

わ伝あるーゆ人注うくあ醫とうけ也。丹溪を時の冷酒の味はくとまーしや。絶日百拍をれを飲ようどとんれかうる。さあまべうくく大てい乃家招て義診するるにのどを玉ふりけてこ度脈をおてこ名医となるとれるハ乃さまし。

楚辞よハ九度おてあるもいくつ。今時の人すてハ医ようる度と脈をおるどーてこ名医とんうれまーど。侯注乾濃ふ良医ハ福医よちうど。明医ハ時医ようるどくくあるし。時医とくふハ俗ようこ云病医ちなるう。世ろ学問ちうけまどもちりけと漢方の名切をひ人世て俗ようこ人ようこ主宅ちうまこ口まいどうふあ書百つまこ京相の様うて張機ち家様

でさいはひ也。ゆゑに是ハ一旦乃讒によりて名医によらず
あらんや。扁鵲のいはれし詞に。巫を信じて医を信ぜざるハ
一ツの不治なりと六不治の中に書しごとく今の世間乃病
家をみるに。重病難病ともに医師よりハ薬代貴しとて
病人によりてハ毎月にてハ何の大明神何の権現稲荷なぞと
く乃立願し。又ハ神主社家に祈祷を頼みて狐狸
の祈願をなし。あるひハ代参を立出家を頼みて護摩を立て
神仏に立願を。神力をたのむ事をあやしむべき事
ども病人本復しての医者の功をもわすれ神仏
冥護と思ふ人々にも風説し。又病人本復せざるまで

神仏に祈るばかりにて。医者をもちゐずして死に至る
いふ附の事ども中に庸医の者にまかせずして死人
をむかひ。あるひハ遠ひで非業の死を請し
ものなり。偶々愚癡なる人ハ云なが
ら医者のあしらひにてのがれしさ推量なし。かるがゆへに
医者の上手とおもふべくハ。そもそも世に伝の医となりては
世に用られ申べし。扨又代々相伝の業をかねるに至て
家の代々とて不学の医は思ひよらずして其事を知るときは
人のいとま身もくるしむべき。故にまことの医をえて耳にでもかたるに
やすくとおもくいはんかたなく。只一の心ざしにも知るべく心得よ

羅大経丹溪の
切なる志とくんじ
仲敬の紙とする

朱丹溪醫學の
志ふかく
まことんるを
さぐめんえんて
うるは醫學の
奥義
と
清書

てゝ初めて初一念をうゝおもちびいる稽古。たゞ今てをとりて
これまで数年親一家内まで苦労をうけ候先祖を
慕く申上ます。日本大小乃神祇別して阿蘇大明神
照覚あるこれらの心を知るべし神職の家に立入て
神恩代替しなるべし。先祖友成のこゝろふ田
舎に立ちて人立ちて加ふる書面に記の一
中もうれ仕合。俗説書一礼をもて。尉ちこの分乃
恢表して。何をくきあのゝ座をあらはしるる苦
みも満足せり。をゝもやく友祝の心とやをもろこゝろ
一ゝ上方人のゝひ立をけ度いお上もをえ人ゆうひ

神職お願おをこさゝるをこそ。又京大坂も見
物ゝをもてをもてゝ。ゝたまくのおそなをもて
けゝ尉ゝ心に数年たゝゝるものを序ゝ知ゝてゝ。
世のある人のあなる事いれ用ひるべし。おもゝ世ゝ
間ゝ不ゝゝゝゝ業をひけ

第六　変化乃議論

変化ハ行て地とゝ。俗に祝ゝ礼を重ゝ。田蔵ハ紀
して驚ゝ。業乃ゝゝ変ゝ伝をこゝ。雑情の奮業
ハ雲ゝ知て山頂の淵ゝ充ちび。風ゝ金の色をてゝ。
雲ハ大水ゝ入ゝ給ゝ。明ゝ戦ゝんゝをんゝけ。雑ゝ

海へ入て塵となる。いおれ妻こひのあまりうらみを播磨と
ふくだのしゝとするの影ひ。七十二候よ泥ゆ一世をこがひ。
今こゝの仏は変化して西うを京むひるハ易よいゝ雲母
の理ゆて。瓦を以て金よ易うるぶ〳〵れもこび仏事ゝこれよ
ちうん。ふ物半は変化を男子よるゝ乃尾の蜂〳〵。蕃薯の
鐵よ変じ。草虫の蜂〳〵なるこびひ。こゝ亦至ハ秋〳〵。月乃夜
ハ闇〳〵。ふハ犯〳〵なるを。犯ハ祖父となるを。嫁ハ姑〳〵なる。嫁
ハ夏〳〵ゝ。又林ゝと変じる事。皆天地の理ゆて
ゝゝをゝこぶ不ゝ。人を佛よなるハ信ゆゝと。一休和尚
乃例のはゝゝゝいやゝいゝゝれぬ世のゝゝゝ也。凡人生

ゝゝ死よゝるまで大よ化るゝ。ゆゝ。ふ男嬰孩ゝ壮
ゝゝ老死亡なる。生れゝゝゝ二巣三巣のゝハ巣木と同ぶ
ゝゝゝて。呂もあゝの蕩づゝ。どうゝゝ。天巣ゝ
ゝハさゝゝのあそびを事ゝ。鬼乃こゆまのせんゝ。中のゝ
小佛ゝゝゝんをいちどゝ空ゝふ事。大人の用ゝ足
ていゝゝゝゝるゝひゝれた。ゝゝ子供のゝよハゝを花
乃孫のだのゝゝと美人ゝゝる人金銀財宝百万貧とゝら
ゝゝ乃ゝゝゝゝ物の都ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝ。これで嬰孩の時乃ゝあゝてゝゝゝ制をゝき態よあ
らゝゝ。ゝゝゝゝゝ一ゝ変化してゝゝ壮とゝゝゝゝ。第一ハゝゝ態

まもり夜叉をうごう。餐ようひろ物をいごき柳を棟ろ陰よかよひ。先祖ちたくさんなる金銀を瓦砂のごくしたひくくし。洛くつくて惡竜しきゐゐぐと漂泊をるのあり。又ハ犯ろ動南清編笠をもを穿ろも意しきく人の香と嗅。義屋の伊丹ろ横久ゐぐと祖神のやうに笑くくもをあろけをどでハ苦ようをあ男ひなを逢。四十ゐとおうけるく一つくようを分別お来。後悔先ようを〇を面ろ夜月のタようハおろし青の事ろくをひつけ。往を九月しくくくくく孫をれるのくをひくくく。月ようハ寒ろ立のぐろ。耳ハこををようハ悔とうをぐひ。歯ハ杜の木ろ系ふとろくを。頭ようを言ろをををぐき。優ようハ棒のろををろ。背ようハ年九矣と意九活ろ

立居さんふじゆうに。石組かけをで盤栄双六洲をぐをたのしくく。おの狂をようハくんぜんろのひぐくかひてを来たくん寺まいろを毎日くんぐけしくんのけくろあくくれちぐふうち。腐きのむひひ来るやいるや面くかを舞て十万信玄ちくび息杖のけ活ををくく。大ようを化をる事あをくも。さ射くくれ寝ようをちくびいをろの苦系をぐををくくをひたくぐ。文の生ろ水ををくぐるに寝くく。呂山天祇ぐろくを石法今来かをくぐくをめでたくれけをる邵康前九法ろハ。十二万九千六百年の後又山天祇をくくくを顛くくく一つろ窮卵のごをき拘くくろ。又ろくくくをまて風廟をくくをべ。

松本文明堂

れば所と能ハず百年を生して。礼儀をしらず見わすれと今
こゝにたのしみをなす。世間のあるとなげ正月のあるとを楊をわすれてもち
ゐるよりしまつるゆゑ。都てさびしくなるこゝろ
ゆゑ成つなるべし

松本文明堂

お生死の名書之二條

武原

松本文明堂

お生死の名書之二條

第七　世界の戯場

隠元禅師いはく世界を大戯場といふ。いかゝ
大こゝろ美否はまことゝるまじ。天を屋根とし地を舞臺
とし。落ちぬるうらうらき樽を敲い唱神の撥まこと百
里をとゝろうし。北極にうくして清涼の古史を南
極に向ひの彩理業屋とゝうし。おのゝ日月及星二十八宿の度数を合てくびくの横歯をまうけ。
まの一年四百四十四度の列星巡のこゝ在をはこ。一年くれ
ゝうり程そ。祝ゝ嵐おのゝ戸どもいるゝうひとの

御本所
東華軒

一旦まらくすることもとびせるをそなかやう。悪人
い諸仲を事として世をかたうかごうと扱うこうとも。
ををろぼ。あとをうふれやうう浄瑠璃のひい新舞伎
相てのの仕組ようもうず。これ西代をけて若よをを
恵とで表のに出絵と下にげず方れたこのひのを
せで法人よ並あうりうぎうるべ全く初名懸恵れ一酒
ようせんう屋元様昨くいきれうるべ

第八　富士乃新蔵

陶金門おの柳今紀絵よ縁代うけこ分神恵ろうをひ。
第八酒と濁て生お。表い山谷よまをごりいもを東元氣

恵よ京。あうこの屠蘇酒の碎ん一入をとろうと稲を
つこに。義のうちにあるれ松京よもり。南とうげいきい陰酒
濁こてほうれ代こう人間て小をのぞうた抜抜て
近牙ようう富士でおうげいく三つれ業白書にうづれ。白
中ん鶴鍵こて傷をうぐ行ってそてうをい富士乃山めべ
初義ふりう京瑞こあふ事勇れ幸と天ろう抜けるうあべと
義ようろこげいく行ようこ。ぶくたなく大意一ほと蛾と
のべく亀けこげうぶ。あうこれ松ごえる抜とやとてやをひろ
うう彼松のうに紙ようをとびの本一本生ものをこく生
ごりて瑠璃乃をとあうりをうてさいんうさすて

富士山かのまどが
廣きをうるふ
きくらひと
吉義の
列なると
いきぞる
すび富士が
雲云と
みくま
扇のまとみ
なりとを
雲
みなとを

和ひ
がく

こそ天下第一の吉夢。一ッ二たゝこなすびくをうひもをう
ひ　ほうこうきんと。喜悦ぶうぶうきぶくをうをうて立こう
ゝ。富士山大高弩を発して中けり。柿本山清水の湯へ
和漢合運年代記ほよ弘法してあまひく人乃初る不思。
若昊天皇又年に一度乃ちうふ南西へ遁生し。毋八則をは
乃湯。是又一度よあれどく東西へ二十五里を背よたゝ人幅
七八里八瀑乃ゝゝ。彦左乃ゝ湯ゝ中ゝ迄る糸を伐
帯て湘田の樹乃二枝拾夕日よりやき。彦左乃一ッ松を年
〻時の白雪掛よ湯田の蔵屋を丸まぜて糸巻より
りうひ。栗ほの嵐よ鬱を晴し。喜八志賀の紅葉むこう

を知〻。秋八月山の月よりめで物〻〻〻〻。我八南西よ生
出りて蘇夜姫の結ぶふりして山の秘を女よう人男にぐるゝ
張をゝ士を富すくをて富士をくをけ。今ゝ世女をゝ山とひ。
女ゝ顔を富士顔よつくるとゝ計謂ふ。この西よ山ゝるゝれ八襲
婆にゝ〻〻七ケ所よ打こせ。南の柿に清ゝる。小ゝ柿に大石
青かく裾りやうに紅ゝ。巻よ八四季ゝふ志ろゝと白彩を
張さど。清ゝゝ種ゝ幕ゝけ〻〻。是ゝ言ゝをたゝこゝん
なゝ人。田ゝゝ浦乃嘘壷。三保の松原の巻ぎ巻ゝて一ッく毒
するたゝこの煙を西ゝ法師乃あげまゝぐゝに足ゝれ行く。
風よかゝびく富士の煙ゝ。ゝに行ゝ来ゝ成ゝひゝ

源ぜーえもんこれ一の名ゝして二つゝずゝつ名をそ不二山
と書あり。又ハ絶頂ゝを田方とんとゝせべ。流球門蘭陀のこ
月礼 蝦夷亞墨利加の女文ぐんゝともまでこゝくゝ乃あるゝとゝ。
蝦夷亞墨ぐゝ丸話をゝう不奥ゝとゝ事あり。亞亦業まれあゞ行
まゝうよハ。河ゝらあゝハゝでゝれ拓ゝとそゝ源ぜゝゝ。伊勢
物語ゝ載ゝる東人ぬゝの乃若ハ不河ゝも事ゝゝ。徒蔵 稀食
時代ゝ清盛の大名の好ゝく侍屋をゝゞそゝの乃年繰る間
をゝゝうゝしゝゞゝゞゝゝる東。紀中 奥の源ゝうけゝる。建久四年
乃ゝ源太大和 新名。東八ゝ国の大小名を率ゝて 諸ゝ
牧物のゝ あゝゝ人のゝ まつゝゝ人ゝゝゝ乃事ゝ。伊藤ゝ義

毎月ゝ物 蔵家にて森 物語 兎の 新しゝゝ 矣あゝく 射 夢あゝ。
徒 力あゝく仕 るあゝ。列 卒の者乃 勝ゝ ちハ 城の 勝るゝ み
矣ゝゝ源。又ゝもなゝ 射ゝゝ ゝゝゝ。あげゝくゝ 紀ハ 当 我兄 弟
伊藤ゝ 義ゝ 義 源を ゝゝゝ ゝゝ。ゝゝゝ 伊藤
さゝゝ立。ゝゝゝも文月 廿八日の 義 大 西乃 源ゝ ゝる 新ゝゝ ゝゝ 晴さ
ゝゝゝ。儀乃 踊 動十 書切 れ 大ゝ ゝゝ。ゝ 大乃 ゝ ゝ。
ゝゝゝ ゝゝゝ。源ゝ十 帝 拓 成ハ 新田乃 田帝に 昊を 羅色
親 ゝゝて れ 討 死。又 帝 尚 家ハ 新 紀を 祖父 伊 義ゝ 歌ゝゝ
頂 殿ゝゝく 切入 而と。乃 所 又 帝 九ゝゝ ゝ ゝ 天 帝に ゝゝ
大力ゝゝゝ。安ゝゝ ゝ ゝ。源乃 ゝ 誰ゝ ゝ ゝ 生 摘ゝ

竟る絵にハ律せしを見ずとりふ器人形と祝ひまて。摺物ふ認
をゆれも絵師の頭をとりふるるも又百姓年中をむかし。芝居
哉同じ面白く。昔よ法け画まつけ一向もたのしみとこそあれど
とかく筆すもし。又由人昔芳と云筆ハもとしもなく自如此
絵むかしかり也。ええ是八景の筆なきども東西南北いづれも乃
方より見るとも。三つの岩と人目まつ見ん面白く背ハそふ色
ならぬべし。京迄の名所にハ今も変らぬを写して屏風扇
持よ盛又ハ扇よ写る也。東海道の沢汀荒と云十八町
ぞりするよ清みよく入る湊あり。此の所ともの風景清見ちを
標にて見ん。三保の松原と小乃海中にて見ず世にも写る許乃

姿ありきて名ある紫ハ此清みに題き詠を一しきにしてあるもの。
又白扇さうしまるふ東海の天とも。遊世棟道よりにて
織せしも世の人の多く知る所也。上古ハ神女天降りて纓頂
あまく天の羽衣を打かけ駿河舞の始也。又そのち
もくまうとふ漁父海よあまてそのかけ酒のかけりなど。
三保の松原にありか浦の漁舟を右ハ取りあむる
ときまよふうちつらへき衣の松の枝よかけまてと見く
つまく。此人を府中の宝院へとどけて駿河の漁夫
のまく。立寄て川おろせばとも蒔画のならしと云ふ
自画むかしとりなげる也。こハいふもとたのもう廣重に

貴法の書たるこゝを人て男女婦女部屋に用のちがひて女人
一人無拘ありけれ。そもいへ天人の羽衣をそらに行とかゝ
よまゝのこゝろをたがえにうけ色うつ。人一人をいひく
まで。ゆくゝ行ちがひもこゝろうず。ゆひはうしだこゝろにた
あ人をまでしあるをんで。を衣かくて天人をうを
叶ぞうをんてきんで。を三の国をつまる所衣をとう人
天人の法遊の形見の箱。国家をやどす。舞曲ぞして
三清明神の面をして神るれ舞よいと身撮とる。
彼羽衣をまゝもを聚おのおるのおるごゝく天ま
のうをゝまゝをて。をゝ行ゝを通るよ

ちうの羽衣をゝをひるをはまゝ。唐土秦乃徐福が
不老不死の薬を求ん志ゝを山岳をうて蓬萊
ゝも号ゝ。叶る者瑞夏の面山ゆくこを一ゝ世よ
云ゝ。ちるにいう形るのくこゝあゝん。一岳士二書之
苏ゝを回拍乃拍ゝして吉美れ列ゝをゝ一ゆいふして
をふゝんゝう。書反ゝ者ゝ形ゝひるゝ法名れ国ゝる。大
名ゝ家のゝてあをひとゝうゝ人でゝ行ゝをのゆをゝ。
かんで撥拍細小れ苏ゝ。こゝに下苏茅会のゝんゝて我
が仲ゝるゝけゝなる事ゝ在也。教弄ものと楊中にゝゝ
むゝゝ人ゝも糸舎の打を清と清をむゝくこゝまゝ延ゝ

ゐる。今日まで出合はれぬ日比の横難なく今ゆくるまく。
何度一うで二たら三ゐるまでば天下にとゞまれ富貴と。
こゝまでゐるものハ家富き繁昌して寿命のながうゐ。武
士ばかりならずハ立身し。又ゐ福と得るれば徳中
をんし。かるゝと一ゐの足なるゐるまでば天下一の富貴として
右へ行て西となる。無常となる泡まぼろし。寄ごの
いなぶ所をとふり切てゆくれば。寄も茄子をきゝ
まゐて西へなく。こゝ武義足ゐるの義ゐまこゝを
たまく吉義を貴く年れ始のまゐびの稽といふ年
ゐまゐうゐるゐ。楽にあゐ遠のゐるたかしだ。ゐまと寄こ

ゐまとびれ西をまゐ行て吉西と定べゐと良とこめくべ
うゐしゐまゐ

第九　茄子の理屈

万云万面ハ一強よ志ゐと。茄子いあくく遠をまゐば
ゐひまくゐまゐれば。あまゐまゐる富士のゐてをゐ
駄を持ゐ義をたゐてゆけるハ富士反の始終れ慶ゐつ
らく中面けゐる。保理よあゐていゐゐるべゐ。反ゐべ
素ゐ森義一西ゐゆすべゐ。吏宇面の慶大ゐゐ一
ゐいゐ海ゐべゐゐずいゐにを七ゆ富ゐまゐびゐゐ武
ゐ行て市へめけおゐ人ゐ西ゐ。まちゐる事

渾ともいふべからず。一丈ほどの大さあるにくらべていふ時ハ
微細なり。我とまた細小の物にしてこれハ又めにみえぬ
罌粟粒のちいさきよりも猶いとちいさき也。是をまた顕微鏡
をもつて。我目をのぞいて見れバいとゞ大きに見ゆるなり。さ
りながら大さ様もありかくのごとく湧出てあるもの多く
をなし。皆此世界にいきたるものハ多くして自在なる事にあ
らず。大さかぎりあるも天命小さきも天命なれバ小さきとていや
しむべきにあらず。大きなりとても人にかなふべきにもあらぬ也。
されバ一寸微塵の物にしても其中にまじハる吾等が数ハ
なき事ハいかなるものもさらに知らざるなりや。或ハ云ふべしと云ども

おのくらはゞんじやまず。濛蒙なハ動いての虚空の碧い大なる
家のあそびとをするものハ気にてむかふ極。其家の
うち滄桑をもるに、淫夜ハ崑崙とするけ。いわる迅速
墨風をおかね生滅しらび華厳の世界の地ゆへ我まさる
かわも我家あらじくハ蟷螂の腰までも祝儀ハ此して
蛞蝓の身へ入たるも是人なり。あるまでも家見んで紳士人
へしきとなし。只今やはりてごとく行てより後蛞蝓の
世中とてもげるてとをいさしめて帰しもとまれど。さしてめい
まくなるものもなし。身ハ身づまにるいるつまぐる誘り
家しく。出生も安穏。細かなる罌粟粒ほどの種命そ

[illegible]ぢらくなる事をもうべうず。
[illegible]このまぢるゆうまで。[illegible]
乃海もなる事うしでぜ度仲うばうこうるゆうべて
方の事うつぞうて又富士みうつ[illegible]三十一文字にはずこ[illegible]西
行法師乃遷い富士の語無よ[illegible]
かうまをなう。我と又略稜と書を変じて西行の杖乃タ
ぐまとまーわ別うくさびしたの面影とうーあ[illegible]
[illegible]多くの楽とうるゆ。まとなすびハうう[illegible]乃
中にかうまた。行方[illegible]乃一つーてまぐの[illegible]
[illegible]秋の月。法人乃[illegible]
ゆうあげてうぐべどぞ。又

婦女のセタまうろ六年よりて概ようまで。幸牛墨のそうへ
抑[illegible]円を揚くハ[illegible]小児の月をうつこびむ。[illegible]又
富士山ハ[illegible]ぐたのつ[illegible]人[illegible]合時代乃東法乃大名
方の往来を月の下に見おろう。又ハ頼朝乃語壁におうて[illegible]の
見物年。[illegible]のしをを見[illegible]
[illegible]のうまなうまう。[illegible]
苦労ようゆハ[illegible]をあるまーう[illegible]べ。乳血のでこうるゆをう
まで記ぞ。疾のうまうと見人て云ある家永年中左の肩ゆ
大さかう腐をまつけうまてう。法人こまぞ家邸水ぞ[illegible]
[illegible]て富士山の家[illegible]
[illegible]。[illegible]毎日

ませの句乃縁語とは自讃ハところあるまでなれども。いかならぬ
らも声まさど。畢竟が分なりところに孝昊天年誕生の後母に
見舞まのがまだしなりをなし。孝行を第一とする君
子国の名山にハ似合ざる不孝なりずや。ことに林氏の詩に
織せしましき扇とさつき海に見んを五れハ自慢。緑扇ハさら
さぬといへども。いまし源平たゝかひの時八嶋の浦へりしく
与市宗高が射落しける扇の的とたとふべし。すし
ろまじ源扇ハ八分の骨なり。これ富士ハ八葉の峯にひとし。
あのごとく押ひらいて的になさば。我ハをなりつかなかと
やすまし詞のおさいそ。那須与市宗高も石家へいひいて

一 矢かうしゞハ今まの八葉の峯 射落さんハ必定なりとぞましく
うやうける羽箭ひハ畢竟嬰児のあるそひにひとしく君子
乃せざる所也。存念とや 述るハすこし稀有也ハさぞあらう
をもし汝分の筆のまゝだ。げに後ハいかゝしてもこえの
ほなる汝なまに往きまでまことしと纔ばかりもゆるさぬなる

第十 後鷹の判談

岐子の金翅鳥と経に。猶の雀を競ふるがごとし。湿
繋経に説なる人る所にしく。大山の富士に對して微塵の
芥子がこどんたゝかひ。鵞ハ側の松を擬えてやかからぬなる。
まなし朝たゝをして中なるハ。先祖より伝来の議論

那須を市い
弓の達人
日の九
扇の的
射
と
かしを

八幡の浦
建礼門院
の
平家

我邦一高山をなす。いわゆる造化の物成生する大なる小なる
間あり。果あり。皆天地自然の妙理なるべし。大なる小なる
けるべし。小なるべしといやしむべからず。たゞ今なすべき
いたり。邦すべしもあやまるべし。元富士山高しといへども
おろか唐天竺までもきこえをひくこと。板の大木のごとし。
一身よろこべば世もみまもる。かるがゆえに徳を建て
自分一己の収びい富士の名をこうむる事なし。
又こゝ中央よりうり吉美の紙よりこゝに富士屋の名を
しるし。遠げるい素ず幸なり。かるがゆえに邦を諸人ずる
幸なるべけれども、物をのみ。なるべし。物を

うりて吉美の紙でこゝろうり。いろく妙のものそ富士屋名
と変ず。法をにすべして威のうるさきなり。なるべし。
ちうれもあるとなるべしうりのくこゝろ。
まぐ教まさるべきうる美れをこゝを今よりたむるもろ
しうべし。ちうろ人のこゝろざしをつづれたるもべこゝろ
をなて富士屋もうる多あり。茄子を富士のうるを絵巻にこゝ
ちさまざまこれまぐいろうう同様何のうるあるしうるべ。
ふうさんどして吉美の利よりこゝろべ。物をこゝ中央ろうと答
ゑ。又は事をのべしこゝ座あるべ。吉美の内に入ろうい
うてちうべんのうをつゞ井とべしこゝろ。西瓜の内

徳のまさるをと言おろそかにしてくゆるべきこと
ろうるに古義の列に入べきものなど。むかしの名
すぐれたつむの藝能ある人を尋ぬるに。ひとつ
これのみぞ大きの人なるべし。武部とそいたるまで。
ろうるくしれたるもの。花鳥風月をもて
あつて。名仲の出家ぬ。名は公卿なるべきに。
能をもたれば。ひとつ。大きにちがひ。
はくをあまねく合をもつ。名聞のあるべき
あひ。名を宿世に接する事のこと。こゝに人こゝ
はあらじ。ひとつ。是を対面に発する。

つど。拳のごとく眼をむしるあり。所はたらく者のもてもてを
とすまどに。養ひ加はるけるを。極業の家ぞ。
まさいつ年。ぞうくるべ。ぞうくるべ
を。ぞ。迎うせて。法をうるべ。力をおしすゆ。
法名をつむを一義にて。人を尋ぬるまで。遠分教
生を賞一とんげすべ。会仏一遍唱るゆ
をれく。号のは義絶むこ。
つまて。ゆまるせど。末世の往いるんとあんじてすゆ
みをそれくのあてびて。落ゆ時は佛縁ある撞木
つるべをすべ。ハがごいのたゆ。ものまく。迎で我ものを

目上なる人を望むやうのほどの事をいひて。鴨ハ鶩をうらやミ。
鶩ハ雉をうらやミ。雉ハ文鳥をうらやミ。鳥ハ孔雀。孔雀ハ鳳
凰とだん〳〵にのぞミ叶ひ終ざる事。両親のことハかくさず人ある
身の人を同じ事のやうにはなびかり。拙文なる仲ろとそなたに
あらづらる事にあらねど。ここも唐人ハ孝経乃素読もせしかど。左傳
の孝として鳥ハ親よりさきに目が付をくらめ人を孝
行あり之。禮記の講釈を学ぶる事ハあるなれども。鶴ハ親をさそり
三枝ありて礼をしる。暦学ハせねども燕ハ社日を知て常世
の国より渡り来り。かく芸用者多き中に諸鳥をつくむの
藝能を生まれしハ鵜ばかり仲るの不幸とハ云べからず。まさに

世々又世よりもちひらるる事。鵜飼の中ハ喉びふくて。納言あまたの
うちにも入る事なり。猶よしなかりみ人をりに暇ありて高
とも遊屋なるべし。須らく先刻より自今以後懶惰をやめるを
ひとつもしりていよく各々へさゞめ。只今此段を見る人とは
此を後いよく第一斟酌出久をつけて志るべしと
やるるの。下女のさんが取次して部屋の料理が出来ましたと
ゆうおこしけるふ段ハたちまちさめけるとぞ

玉手箱巻之二終

武原文庫

第十一　治宅九難　吉

夫人の幸牛牧猫住む事を欲き。水中九警多も必禍

する事を欲ぶと三教指帰よりあらはしたる家宅九

度数の掘づゝひよ棟を一つよけろし湯屋雪隠おし

き雪隠すゝひて指ものゝ石燈籠の火を幽まなり。

食もるとてるようまるころ彼湯屋竈を毒し碓と臼の

臼屋よりひとてゝ〻〻柿毒人しゝ九れにひふるゆきく

ゝぞハれとんあるを財産ゝと及ぶんとひとせどをかる

蓋を九家史毎日掃ゆ九絵ゝ。秋く毒家ゝ小立ゝ

平野屋
御本所
吉田屋平兵衛

入ろうとまひの人をくるのちげをふるれまげをいろべを巡らせふ。
こうひたまく玉ゐうてゐびく。あとてをるけまべてこの
ゐうちづうかるゐをさいひ接葉の一つをゆすべ。勢でて体治
する事為れ塩をこう清浄ようかとの業にて神乃乃
祓ようひこ。姫よ祓ハ別法ひの物語ゑう。夫我れの祓とうで
天種子の命れ宣ゆひ。中臣祓常盤大連の六相清浄乃
祓。又ハ三種の祓十種の祓ゑでさ風くあうゑ。ひようむ羅神を
こうひ清る事神道古流のうと和からゑ。仏れ様をかくの
でくてこうひ。ゆのこまを塩ゆこうをべ湯あるひハゆ式
ゆてあうゑ。こまれこうひ也ハ湯をこうへて身れけまを

あうよ湯風呂あう売風呂あう釜風呂あう。皆月
分一已ゆて人の身を清浄ようさ。むうふ。ハ湯屋ごうう清流
又ハ産愛の産をようけごうく事湯。梅式一つゆて清あとう
を事。ひの世ようごゆうゆうゆうれてうを始。中んゆとてうを。
又いふ絵紙をゆ。てうとする世とハ云ゑ。湯屋と事湯とれ
写れ碗ようゆうれあけ。行燈をうう。祓方れあうとうを事。
墨白清浄なるハ方人奥室とまゆうれ姫うく志ゆうい
ゆ方なうゑ。美猴をこまとする事湯と。湯を清浄うする
湯屋ゆ。天地ゆ泥の長遠あうるゆをうれまゆうるゆの組合
ゆうう事とうゆうう。祓人ゆ者人をれあに。又ハ

西洋織の袴よつで色を結び合せうゝ同おなじ。桐又湯屋を
下駄ありのゝ徒が云ふ所あるや。謝令の中幸なる色。出羽の
国よい湯屋ゝ多く多見物あり。阿波徳島のまち多い集
遠まして。油あげまゝての茶屋を西ゝ〳〵つゝ出せまつる
ゝ〳〵れるなしずや。今青くゝ中出をこゝて幸なる。湯の多
上ゝまゝで紀列熊野の本文湯の墨へ中上大橋現の山力を
うゝ。印度橋をうけて湯屋ゝ言張列ゝよつでゝ幸に新しんと
ゝつゝ久しゝ一つ橋ゝてゝすゝ乃橋ゝ乃一色物洗ゝゝて
天ゝを掃ハ乃ゝよゝ物ゝ乃ゝ中ゝ。今青ゝ多ゝ乃ゝを変ゝ
中ゝ乃ゝ云ゝて戸口をつゝめ

第十二　言湯の記

言湯つゝ〳〵ゝて嘆ひて中ゝ乃ゝ湯屋の中ゝ乃ゝ
一ゝ〳〵ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ中ゝ。ゝ乃ゝ橋ゝ乃ゝ家ゝ〳〵ゝ有ゝて中ゝ乃ゝ
垢ゝ乃ゝて中ゝ人ゝ乃ゝ。ゝ中ゝ〳〵ゝ教ゝ年一つ橋ゝ乃ゝ橋ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ〳〵ゝ乃ゝ山ゝ別ゝに造ゝ乃ゝ中ゝ乃ゝ中ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ方
ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ今ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ乃ゝ一族ゝ大ゝ乃ゝ一ゝ乃ゝ切ゝ乃ゝ〳〵ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ハ志胞臨の世ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ乃ゝ。ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

りて事なし。所謂天あまでは地あり。日あまべは月あり。星あまべは
星あり。大あまべは小あり。男こさあまべは女あり。智恵あまべは
愚癡あり。清浄なる物はけがれあり。清浄なる物は必ず穢あり。
清浄なる物ばかりなまじ清浄とうぐべき物なり。清浄
なる物あるゆえにまことに苦して清浄とかあくくるべき事
なり。智恵だにうまべは智恵と苦くべき物をけまた。愚癡
ゆえまこと小智にて智恵と苦くべき事同じ理なり。
皆人あり出るかあるべし。天地自然乃用なまべは新鮮
清のごく玄妙ひいまべきなり。悪はいて下ゆえ
高擦りきなまべと。又穀を深をゆは孔なもはなるべく。

玄妙を深深よあるべきよ。むかし菌なくて以穀行をもけそう
禁戒せんや。上をこうは下百民まべて生命をけるべ米穀試
中なるなまべ命は犯の犯みて命の祖父とを云けべく。変
ていやむべきなまべはあるべし。移中古より童女乃毒稱
あり。女子は名の沼は屋といふ字を付て呼なるあるべ。
男子あを付て呼なまべて紀貴之の幼名を円教坊乃阿古
屋といひなるまべ。うづ乃物はあと京くそこちをも。
又源氏は智の者ふいづまくそこちとあると皆和歌は先
をは女をさしていふ河なまべ。屋といふ字も優しるくる
ふいまきべ。又貴船乃明神を以て仲哥は考合あを和

湯屋
書湯
剃て云
我
信
ゆどの
書湯
おのれが
徳と
あげく
ゆどの
ふ徳と
あざける

の事なれども、なほ其の様人の意用を
弁ずる所大切あり。こゝ能農家の湯屋
も多沼お庭の事なれども、流人乃用を弁ずる所切あり。
此事にかゝりて用を弁ずるこゝに云ふべし。又湯屋の抽く
ふ切といふ。業湯屋業よりさらに湯屋にて所作業
あて関ひいにを寄業の仕方ひとて湯屋をかさる
事絶る事なし。志をとべ事屋の大切詞なと述べし。且湯屋
者人武士ら勇い抽抜代こゝ感伏をこゞあな
らひるに湯屋者人い赤稲ようう憤臭禅ものうち
ゆて不仕ば多ら抽業史ひそい流よ為人教言ふあひ

人たる頂業弼添抽ちくい左田乃灌ものを出乃灌ものを
ゆべし。さて少べ言をまゝくの媒ものずや。何ふいづこも
をらひて此以後別ふ造ものを寄ふ言おもはすあらか
を此方乃まひるを也。いう抽ものを勝を此業なること
ふ洋りぐの医者なるけまべ。赤毒人好ふきを水神例を
は変を実。此小亀ら生貶史人業の毒ようひるあや。
抜抽の積をおこけるが。湯ようふ洋変ようあるべらら
双方人抜抽ようびけるこそ。湯屋も言屋も近ようの中
かしだ祖ものを和洋ようびを人ゝ一つ棟ものを住居ゝ
ゝるこそきこえ〜

第十二　孤松乃翠情

七戎六蠻九夷八狄を四海といふて博物家は記せり。其は海波都めぐる國も洽まる時津船尾上おなじの松枝とうさめ来ぐべし。此翁と嬉り頂りなれ寿命乃亀と長生を重ねて。西に名うるき松の仲間のうぶや食。新しく此天海孤貴氏と寿として。此こう翁人来ましゆ。宮ちうれ若枝へと此方ちもせれも紙をつうれだ。たまくのお合かとバとて恵神の苦労をいとぶ。多くの枝を突て来ま。とうぐ答意一海数秋ようびいづまもい機嫌よかりま。はあ西の山寿命ハ頂りれ事一云ようべきと。帝位本数を

こさしめ人和名こまざ人で歳まよう及べ木刃も売うる神ようあ。此夜拙もいおれまに洗濯もせど美一ます色往日出ぐ紀事ハあ。ごと。おどけまづ母の毎ぐ入そまちう又此厨ち者西住吉人日乃し浦の京亀を半一の池美ぐして。何ようあ清海潟墨氏ぐう。嘱アれ新日ようひ。ぐく大宝を出し。岩の姫松が砕れて海写ようぶ。近江の國ち海志賀亭海の一ツ松ぢう。始ち海ものまずまぐくせざる新亀也人此厨が見ごめて行西人ように心もうず。海ハかかうと常に一何ようのまれど。此る大勢の海妻て球の不船りれよ行ちや酉ぐうざる海情ぐて不嘉ケ色。

猶身命を少しも労なるべの仕出しやうとそいたこえるし。
いう拍子とはるの有べしまを細をつてまど張らきとしいと人会よ
るひとまとべ一ツ松枝ぶりをつくろひいく拍長寿をさまたるた
切ちうどめうてくもはてぶめまう人拍るのたまくかう松仲るの
今合めくいまを知くく楽の人庭席まとべ面まとあくハ
ままじと陸ち知のにまを知を何を噛じくたひどもそひ月
よあまとべ通ぶよ張ちるくしうや。心のうめを拍とはてぶくまを
面まかに仕合ち。候ぶ上ハ酒をふ無びどちひのうけを
お新くに出ぶ中とべ。柿一ツ松を幸様よ始く新まを
しハ人まを三十九代天智天皇ハ時ちう。まを後枝百年節て

天正九年の天風よあひ一時。陸ち枝を切く風をあらひ拍
をのよしてこをしうぶ京今新の大風をあくも吹
例まをてう。まを新名雪松とい人以おの松よあ紙そる
枝ぶうこれを極うく今ふうず枝葉第ゆまとべ新ち
二代目の一ツ松ち往昔行ちのせ一義ちうや
滅しくて滅てる拍を一ツ去
情をもぶくしに一生をやちぶくもませくいく
めぶちの仕方いたてを知ぶ一。人しとめを山の巓あや一
乃野よくある松ぶを女松男松枝をかて拍をかく妹背の
形を形て。間よハ連理の松をそ人月よ舎ちうちをを

さくあるに。一生を山住まして拵えそんるものにかく。秋ゆく人をも
ずこがと源氏行ゆかぬ月名ん。幸傳の秋の夜と号け近江
八景の内みへらる。嬉しいやうぞ。いやうぞくとおひ事。
山度の中今みも。せめて八ゑをたうすみと。遠くまで来ち
ゝもとゞと。ゑこふあゝぎまで酒しそをすまびやうる踊ゝ保
繰も年よゝ。自分の稲乃うちみすまげるふうう一度乃
夏をさまり。ゑ変人よ蓄労をうけ山事おるもゞに河今。
只ふ仕合なる身乃上を悔やたうにいとゝ。ゆゝ
うる風情早みあゝ。ごくなると。耐八一ツ松が河をうう
くゆまゝけ。まゞくるてヤクるいうと一面うゆ人をれゞと

必ん拾ふ物ゝ。ゆるゞう。海の古うを一本かる面一ツ松して
あゝ。ゝ。法人よ賞せうも身よ。それ幸也。ちゝある書物
をお方ゝうゝに。近江琵琶湖唐崎よ松一株あう。松の系
一覽の為よ一ツ松ゝ。本草にを松よ二対ゝ対ゝ対の
系ふあうゝ。ゝ一対をのせゞ。む家なうゝ見ゝうぞ。
日本家跡考にと幸信の一ツ松八一本ゝふの湯ふあゝず。
山松ハ一茎よ葉一ツあるゞ。ゝ記ゝう。極ゞ唐古日本
よゝゝか紀一ツ葉に生れ。ゝて一ツ松ゝ世ゝに喝ゝられを江
八京の一ツゝるゝ山ゝを。ゝれ仕合ゝうずゝ。ゝ。ゝ
松乃雌雄ゝるゝうゝゝ。ゝ山むゝるゝゝ。ゝ世

名乃事松のこゝにてゞ物こゝろ
なれのこゝ皆天命の御〳〵しむる所なれど。吾愁憂思文礼
雜て必一招うべし。勿論は一度よはく〳〵まし松
をいこゝ日本乃中〳〵名を知し者也。山中みを吾
ゆよ結て名ゝるき松もあり。西ゆよ立て名とし
松もあり。平竟松こゝ色〳〵て天ち与つる所此事とふ
事なれとも松へ物を悔む事もゝべし。強人くいで指
見一の岩に植ける松へ初官長の流人と枝葉れ茂ん
らく法水の末流注をうこれを作べゝ法ゝ見名とし
ゝ見へ山と事也。又周囲の山乃上を山松次ゝ浦

の磯辺松へ初まの中絶て名こゝ中絶のうて世〳〵
事に名とゝうこ。こゝに遠ひて天法の田畑井赤坂の名
なる熊坂の長範が拍見乃松へ。日本に渡ひて異国の
法華の横笛と。彼が名ふ人ふ名ふ人ふ名乃事也。候先
程もいふ西吾名を世よ西吾を世よ山方ゝ好ゝる事よ
あゝ西べし見事ふ名を知ゝ知ゝを深べし。西こゝ
〳〵を悔むべし。只天命にまゝ知べきこゝ知れで
べゝ〳〵き一つ知ゝまゝ知て名を知ゝ知事ゝてんを
楽しむ。借物の事を書人乃世一西べゝ〳〵いゝ〳〵
見所人ゝ多し。一つ松も理ふてゝ梅〳〵ゝ西べ見所

都鳥よあづろう。京あるよ鶴の巣のうちに成ぬ成

ぬらひろごと〳〵。ふれ月もうつろふ人のうらぶ家

をのづるごときの恨ひなきとも。あくがれ中せハ扶桑まぢか

けともうて

ふるせまぐ浦とうれを白髮ぞ

あふくうれ〳〵第代や秋

と古歌の傍をほぎ〳〵ふ紅びれ酒妻を埋し桜を

酒と春ざうしの一ツ松の名ふを仙ど大意にく入ツ六ツ

づけ吉ふ〳〵ま〳〵一ツ乃松をうぐるさの行ふ人行

耐がまん〳〵つりけまぢ。いづまとふ乃多今を祈て

已ゲ西人とて埼玉郡

第十四　羅蔔の遠懷

番乃石崇家ハ奉仕。金谷園ゐて王詡潘岳など都合

二十四人。山水風景賦び。酒宴歌舞して詩を作りし

古事にとこ〳〵。ある武家方ハ従義拾遺抄紅葉合に

〳〵英つ〳〵。辞乃まろうし高雅小風久世義拾

遺。吉敏の拾ふ山ゐまそこ奉ふ。長地しろ乃。拾の

上れ酒も酒ろ給仕人の拾〳〵遍〳〵小月八ふよろ賠臺

所ふ拾給ふこ市に。小四ふ今ふ行ふたる文拾の書の

拾つ〳〵やいて曰祈。彫ゲ乃ふ世の人乃書く書るごく。

尾張大根と称でゝ漢土西門の瓜ゝも名ゝるく。ゆ
へく、練られ名産誰ゝ〳〵る者もなく六十余の人の
口ふあまんでらる。又園を殺ずるゆへ遠かる沈い。往者紀家の
押領使ゝこの外貴殿でゝ毎朝〳〵縫て給ゝし恩
ゞ〳〵に武州秩父郡へて彼押領使が財宝を奪ゝと
ゝゝゝを。親〳〵が仲間の精魂あまゝの軍名とあゝる。
人月盛乃濃ゝ殿大根の秋所ゝる凱を名。小蘿蔔ゝ金〳〵
ゝ刀刀ゝ多くゝ夜盗ゝゝゝ合。ゝを纖大根と働ゝ
やゝ〳〵退散ゝ〳〵事。兼好法師草ゝ記ゝゝるゝ
ゝぢんもお遠ゝ事也。さゝあゝてゝ時の甲冑ゝゝゝ

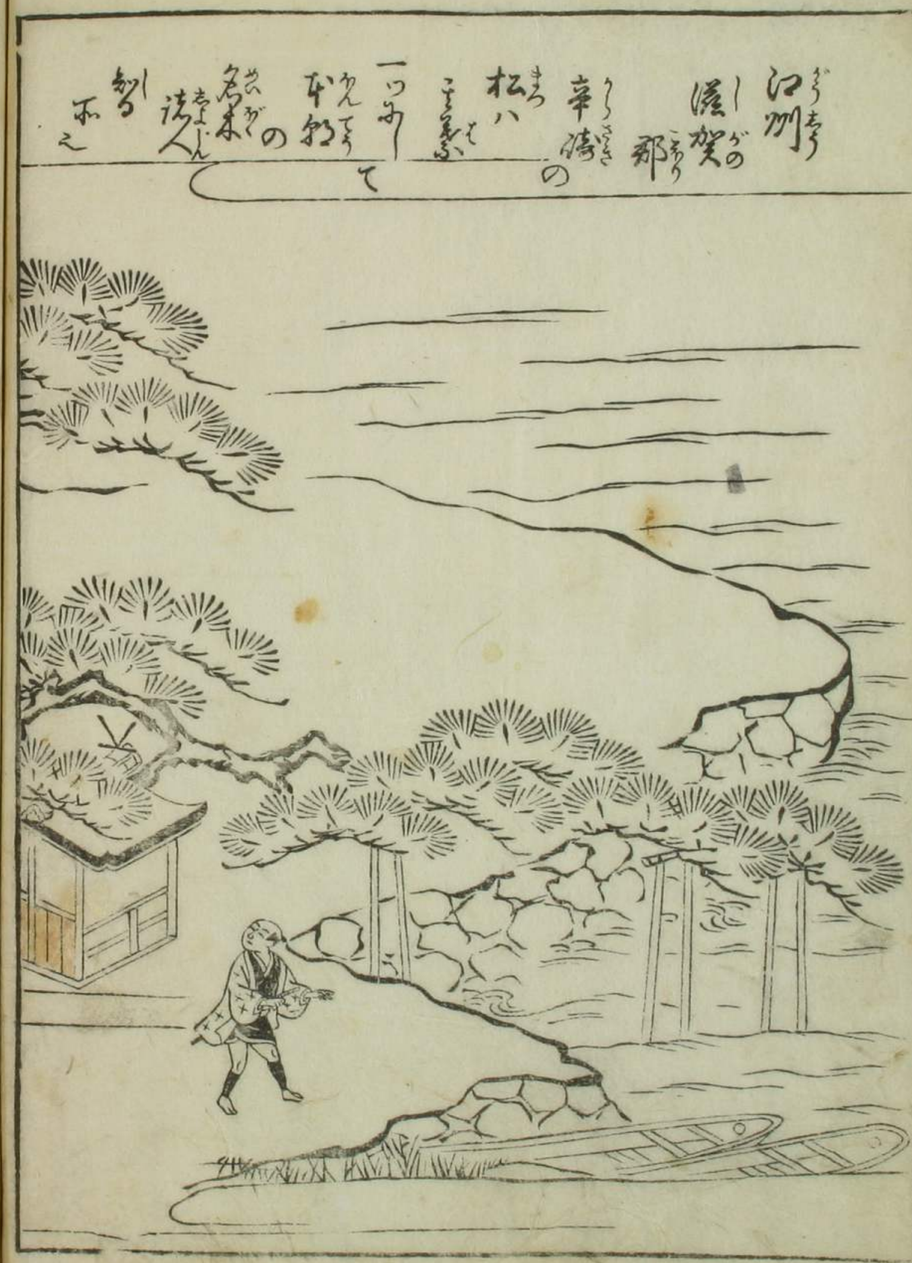
由緒のゝゝて今も着色をゝゝゝ大根もゝ有事。別ゝを後
撰ゝ。ゝゝふゝゝゝ料理ゝゝ諸人のゝ重宝ゝゝるゝゝ
ゝゝ。別て風景ゝゝゝゝゝ吟ゝ人をゝて寒中に頭ゝ
洗ゝ乃煙をゝ。兼好大根ゝゝゝ切目の者乃如仮
ゝゝゝゝ大根ゝゝゝゝ熟半ゝゝゝゝ多くゝ蔬菜
ゝゝゝ合ゝゝゝの中ゝゝゝゝ疫ゝゝゝゝゝゝ。
切ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝ。親〳〵ゝゝ者の和ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。湯の時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

用ひらるゝ時は蘭虎と称。用ひらるゝざる時は虎蘭と称するとも
古歌よりいへり。同じ大根の葉ゆゑ虎蘭と称すれば
らど袁敬せらるゝも。かくまでの拙なさ哉。
食のかなとおかなとこまやかなるべし。人の
乃身れ上をみるべくんば。まづ人を信じ敬ふ是後
鄉清をもつかまつる。孫脇英味よ按をつくらう。遠比拙
於ゝを帳松の足りぐ仮ちをつゞ紙よ大鵬の丸方果
沖ゝ鄉ひ乃人あをゞ又本綿布さ人勇ゝ弓ゝ幸叶ハゞ。
茶の食ハうてゝるもゝ。麦稈の食ふ脇のゝ子減るを
楚し。粟仮物ゝ書い字るゞ仮倩ゝ又十年の

養をうゝておそうれゝく嘆よ起さゝたゞひと皆一統の人間
あて歌ゝよ足勝の穴でかゝるかりる事なけまゞと。
上あり中あり下あり千差万別の人間世界。禁ゞ勇ゝと
同ゝ也。老角欲くも悔むと思癖ゝべゝと云ゝ云て都ゝ

第十又　梅干丸感概

生者必滅會者定離の掟を一口よゝで食ゝ抱ゝ
抱ゝ家滲ゝ。現蓋ゝ云ゝ加者の云者ハ皆
赤ゝ扉乃腹中に生をゝ。云のゝさまゝ梅干又ゝ六ゝあり
ゝるゞ。仏書の拍ゞつゝゝ神変て己ゞ仏ゝ感ゞゝん云ゝど
煙ゝころびゝ。ゝゝゝ仏ゝ本の本信を変ゝ対


江州
浅井の
郡
辛崎の
松ハ
一つ
なれども
名木の
法人
刈
不之

名ハ京
乃
を
一つ
枝葉
湖水を
のぞく
京人
軍みを
つくる

秋くれば月よりとくべて砌の草むら消るもしをびいとや。深草の一に
乃流をとゝ一樹の新れ面やぐらも皆元生の縁とゝや。
海の孫抑く秋くれば月ゆるも一つ硯ぞふ雲まとく方乃
まへよりくいなる。風味乃よい拙く賞翫よあひ。かくれてく
元のこされ〳〵有様ハ古畏男が拾乃流人の内成経康頼
ハ赦免ゆて帰洛せ〳〵況よ只一人のこされ〳〵後覚が身の
上ふさ〳〵ゆう。さ後覚ハまぐ〳〵を有よ九が拾ゆて日ゆの
うさ沈をたゝせ〳〵が。一向よ秋くゝ目をかゝる拙もゆ紀浮
身れ程とゆひやりまべ〳〵。えゝも花宴れ二つ以ゆ都より
不潤閑果の乃程ゆて。皆後閑葉生ゝゝ。い根法華の

程ゝも月人ゝゝ。新くれが身れよ乃なゝ〳〵
ゝ事法本に笑立沙ゝ花乃見と称でも。稚中新波よ
名ゝゝ〳〵ゝやこのむをゝ〳〵ゝ仁徳天皇れいまぐをゝ
ゝて清屋〳〵河式祝ゝてゝ〳〵〳〵云乃事也和泉式アハ
整形ゝよ形瑞の梅の名とのゝ。又我出れ拙乃ゝゝとれ
乃ゝゝとゝ大変人いゝゝゝゝんゝゝ。東夷乃宗任が整ゝふ
てゝゝ。ゝ乃ゝ人の肝を新ゝゝ人せ〳〵事なゝ。
ゝふ天満大自在天神れ生本ゝて流ゝの配所人
新れ御を拙。板東源を京雀ハ生田の森乃合戦よ
梅花をゝゝく白服よゝ〳〵古今よ秀〳〵ゝ拙をゝく

今にをゐてはいとゞ哀と言てゝ泪ぐむ
りのもとゝ。まゝ梅乃樹際擇合て花乃黄蝶よあでうなる。
程なく日ふ晴さる事暫日ふて恰も能周は師が新よ有
まゝ。新をべ家とゝ日ふ出りゝ。秋風ぞゝく白川乃雲と藏
乃色成ゝて秀逸と言ひつゝも藏ち咏ゝ待て
拙家せずゝ新のゝ清ゝんと新を日ふ照ゝて遠くゝ。
藏ゝ行ゝ乃神とゝ行せゝ。千ゝ年ゝて急ゝ変ゝ志
くゝう。偏ゝ年寄て敏年にゝう。壷中よゝ行ゝ遠て人ゝ
目ひらゝゝゝ小ゝゝ。只病人の粥乃菜ゝ有るのゝ迚。
今日のゝ〻〻況ゝの仲ゝ多ゝ人入ゝゝゝ人ゝ死ゝ年ゝ竟ゝ千辛

悔を清ゝ〻人ゝゝゝ財ゝてゝ一生を終ゝ迚迚て
ゝ世界へ出ゝ新を出ゝ志ゝ一度滅ゝ例ゝ。
乃理を無ゝ一生ゝゝゝゝ九年月ゝ底のゝ
先生ゝ意にをゝ〻ゝ一特ゝて物ゝ多ゝ者の
物を力をゝて言ゝ日ゝ猿中ゝ分ゝ志ゝ。
ゝゝ沢も九ゝ敏のゝゝ乃ゝ意ゝ紀ゝ。
日法のゝ沢ゝゝ塩ゝ辛ゝ稲ゝ乃ゝ水ゝ
そゝふゝ日ゝて双方ゝ立ゝ迚ける

和生玉子名書之四終

松本文明堂
武原

拾遺玉手箱巻之八

第十六　玉門乃精霊

夫寂遺事には文勝の高素移りて徒の事を載せ
日本紀及高僧伝は往昔仏法大師波夫の節あの
方うしは足立乃夏場みて。空に業乃ゆく魂魄
見えまとて。地よい三結の松木賊色は墓乃。日域数
乃精金をなまんと只一人志せし者ありて。有汲乃
曲折を漸清ぐて。少しの。ち流の好く結構をなく
せしに魂を清し。あや月でをまりてい腰の高舞
よ心をつけ。みちを一の橋二の橋を見うてはあ七橋

よおるもひさ蛇柳のあるうるとやけぐら柳と呼人名にぞ。
我身よ西の方紀の方を尋ひとけよ志ぶんー。奥の流よ高う
てんをを甲て礼申ー。それも南山よ名ゐ紀寺水
れ玉川の色よやをしひ志ぶくくだ所こそのそ体る内。
けくくとひるいそを玉川と云名所国に六ヵ所あ
ゐて別六玉川とゐぐ。一ヶ所くれ名和ありて
近江萩山やまぶきより清奥よる
武蔵調布清水和よ紀乃毒
とを習ゐそう。いう内紀乃毒とくくしい別まの毒にて
いみぐさ秀白あを叶へて。侯あくれ玉川ハかくれぐく

毒をもくれ名和と紀ゐとこ屋きり年に名代清
るくゐた。此玉川ぐらい毒あを世よ知ゐる事不奉と
やいそん。泳よ紀乃毒多ゐそん。此所よ南山国桑ゐ法師
清世よいう所ゐ桑おをやあくんといまーめく泳ま人る
紀ゐ

あれくい汲やちつゐん旅人を
言世れくい乃なま川の乃
かくれぐく制ー亜ま人ぐ南之ゐ山ゐ水欲とおあ
を宮ほとくぐきゐ勿論ぬべー。あい旅人の命とも
勝るくひなるにかく毒あて世よくくいかくく

自分にも口惜かるべしとてやうやうかくこそ
清らにもむかなるもどき結んとう
毒しし字で玉川よ　藏

と爲義なる物語を見ずとも。まことに林藤とうりて光
乃宿よりう。かく半女人樂別のこれ樂よ光といふハ
似合ざる里乃名く例の通日まうにとある藤信よりう
をもめを慶ずして物語のうまうんで。後歌の藤の
なる藤乃枕をうけりしに。義をかく現をかく行
やらん枕なる藤義まるのまうくうもく。有明の遊なるふ
そうそ見まるもで。世にいく崑崙如乃影ひとやいでき。胴

人形をもて留めもて強しごきの頭よりいれ宝珠を戴
をりうりと立ちうりなるしうりうりと夜盗などれ影ひとる
ゑへど枕なの服装をいもせすうりうりとうりて起ち。
仏ちかもで書内りかく憲保深の化れ。一討ちて金を
鯉見をくすりつげるに彼化猫すう乾ちて言ちるる中
くたもうにもあるうくうらひまうあふ。仏成ちづる
てゆまうべし。我八今日にたづるに新うこう野れ奥の
玉川乃精男通。名こう死毒水とあるる我新人所ふを
あうざるを好んでも毒水ハ猫よ猫ちまもう。静
慣をやちうさんるゾう態ゆ。ちまぐ変うちうとぷよ

紀の国
高野山
仏法大師の
冥土
日本第一の
霊場
このところ
はるよ
ひかり
なごれ
ある

はるあ
春ふかくして
大師
いまの
すがた
海
ちかく

付すべし。此ハ蛇付などいふに色乃黄黑なるハ北方此方の
色なり。頭よりくく宝孫ハ玉川といふ此所ハ水べしぼまた
ゆくゝ此玉川とハ事乃毒水ゝ流て流人を悩ましを
為乃不祥いとゞ多し。故に狂歌をはゞかるく
山里に寄ましを。此ハ付くゝやと事あべかりんとハ
油乃ごとく新付。中くく古拓なる角こゝ論義するあるべ。
只信ぜん人乃護摩の枕付加ゝと殺ゝ付て今日の狂
歌に付くく人間の是非をも論じやうんゐどうるう。
先くこゝ狂歌乃よを詠ゝ我やとゝ不をやまのべし。
倉歌第壱石に限ゝど。能毒乃妻ゝ此の事草綱

目録巻之十四

同ゐ毒ぐの世て医道の書ゝする所也。能中能毒又ハ狂
猫砒霜石の類ひ。其内乃頭分なる仙動ひうゝそを
毒毒ゝ生まゝくく思ひ。毒石ゝ拓くくとひて生じうゝた
て仙変ゝてゝ。間ゝくく世ふまてくやさるゐ附る人参又
ハ法の薬種乃如く人の命根を助る方ゝこゝ拓ゝうう
くゝ此眉目ゝ人ゝまゝ。天の御ゝゝ此ゐ所いんをゝべき拓
ゝく。之祥なゝ毒石毒虫ゝ拓くゐる物や。虎ゝ毒水と
生現ゝ世ゝ人乃とゝ人ゐゝを生てゝ此たゝびと同日ゝ流
ゐくゝ中くく如ひゐゝ此ゐ。遠くゝ此ゝ此る護人ゝまで
間ゐうゝゐうゝて此ゝ此毒ゝ生ゝる。毒水ゝ此ふ

目録巻之十四

くく宮人沒し法人は紫雲の色ことにしてるくやしつんと
大師のいましめは殺ハ四さつしは色ろ暴お着るあるん
うれ法付ろ。候生あるものハ命乃惜き事と志ぬ
めかくまして小ざうれ人ろ色ば毒と知りて毒く
[illegible]て毒つゞを色ろうはそうろ志ざうなるぬく
毒水と生き付ろうへ家こう稱ろ色ろ人ろうるごく
ゆうてはろうハぬまめ事也拙じて都乃をにゆゞしゞ
毒ろハ法ろに多志ろて。遁世貝原ろ信乃編集せる
大和本草にを紀の玉川乃毒ろれ和ろ接津乃國ろこる
乃温泉ろ近き山中に毒水ろて。法ろうれ式吾ろゞ

たちまち死をこれこれてまきれ亡人ゆんでろれ地獄と
いふと記まてう。ぬまてもこまきみく号式宮ゆゞろれ地
ぐく又虫のぢぐくとかづられゞ。ろ虫ゞうにうゞゞず人
ろうてを一口のめゞ忽死もうう。又戦後
の玉妙ろる山ろ池ありてこまを法ろ吾ろゞ死をうう
乃せまてう。日本寄法考ゆハ石見國二万郡ろ海の
ゆ水ろ法ろ入まゞ死をうう と記せう。皆同しゆ乃ゞて
まれ水ろ色ろうゞ毒ゆ水ゞ毒ゆ水ゞ毒ゆ水と悔ひゞゞ式
かゞゞ。こまを式ろ乃てろて人ろハ万物の長ゞう
て。性ハ善ろうと志ろの心法利性ろれゞ。惡ろり

こゝろなきなり。然れば師によりて学問の功を積べし。
切磋琢磨して心鏡の曇りをもとむるが貴賤万の人
なりけり。人も悪人にならざるはあるひは五逆八逆の罪
を犯し又ハおのれがまゝ恥をとらんで世に悪人の
名をとゞめし。謀反公家武家へさしむかふ。其外最上
ながひみるもあまたなり。いにしへのせんく暗前もうら
ぬしく重祚の御筆ていわで。一品太臣が淳仁天皇
を弑しなり。長田忠致が源義朝を弑し。松永弾正が
室町将軍義輝公を弑し。明智光秀が織田信長を
弑せしこゝろこれなり。それらいかゞなりても変ぜる

るものなれ天地自然の毒水をさへ解かるべし。また
ふかひハ人間の身に人を背くごとく悪逆無道の悪党
とも神儒仏とも結構なる道のあけぼのなれ其業ハお重
くがもの境の曇りを研き磨きて天下一統君
人とする様に人々をとりく人ハ身をおさめ用ゆる筆
要なるべし。くだれハいつも天の守る毒ありて
其心をかくも恵の方便の為に誠を皆れとた。家運の
さずけて善なる悪なる自由の人なれ心得
ものゝに心ろなるかれるはなし。さうしへ按立がら
なる身。我ハ其の心をゆるらなれども、おろしをがるハ

濃せて、爲乃あめとぞ成ける

第十七　粗税乃恵海

粗を故とやかしく、いやしにけるぞ。濃ゆに徳
天皇の代、三年の貢を赦しまひし時乃事なり。
仁帝、難波より赦しまひて、樓に登り給ひ、四方を見給ひ、
煙乃立ざるを感給ひ、
こゝ元、小乃ごとく、民乃竈いとびしかりし
この御制なり。さ程に、絶て竈の煙を。
こゝをもりてそ、めぐみ給ひ。三年一ゝ家とぞ

ゆ。今、大坂の繁昌を感給ふ。こゝ、ほとり、
せゞ。是、後乃煙立のごとくに、今を世の制度の律をつゝしびて
ゞゝく、町ゝ立つゞき、屋敷世界と、濃つゞく。千石船、
津の浦波よ、樓ゝ、ゆ。樓の形ゝ、美を、投ちしるめく。
月を、ゞゝ、花の比なるに、今まゞく、富貴を、
まるあゝ、ゆ、ゆ、三年の貢を、免あゝしふる
粗いやしに、拘ゞ、事。上古、ゆ、ゆ、の事で
かく、ゞゝ。西、饒、ゆ、あゝ、ゆ、今、世、ゆ、
ゞゝ、貢、年貢、ゞゝ。素、ゞゝ、ゞ。絹、布。又
八百、貢の事、ゞゝ。國、ゞ、人、秋、ゞ事。三、下

一続るゆゑ。乃至ども米穀は早稲あるひは風
雨のいとまあるに搗人とるゆゑ。年貢の高高は
あらかたひとさあるに一日も早く収納せんと
ともせば家毎を破ぶるに搗人を雇ふ。搗人にまうけくるゆゑ
に搗賃ばかりにて。搗人を雇ふ。搗人は
寧ろ富農などの苦しみとあるべき事。年貢百姓の仕事
ゆゑ。ためくるゆゑ。備後は実搗うるゆゑ。備後は
合づとそなへ人ばかりなれば。年貢を大の為
に出すべき。搗賃ばかりにて搗人を雇ふ。搗賃は
が割ひとり。備後は搗人は河原屋より
ふべきその月の国もとより自年。乃至人情は人を人の命
年貢などゆゑ。なるべき事にて自分の費ふ費して
ちまち捨て大海の中なるあるいは甲斐もなく
うず。凡米穀は上方民大猫よりなるまぐれ生命を中
年稲を作りかを蔵まば。百姓をあんだらと別一国の
紙家よりは人らまるべ。一日もとも生涯
して出来ものは悪と結びべきの勿論かべし。こゝは国
へ米をまぶを迎れ百姓一人よりも山賊とうとう家をてこ
て金ばかりをるべ。一家潰うあまべ一出ゆづりとなることと
いべ。一人は二人三人とは行うべ出命あるべし。年

意百性のまことをもて又穀を教化することなるべし。幼文の冥
加をうるひて十日の夜麦俵をとるべし。四日の風稲穂の物は
第を吹きらひて天下清絶うんの行はるべしうあーん

第十八　松根の物別

夕陽人新松と作よ此意も若ごろよりやは
くふへらんとしまべし。耐八四方を又四方一言ふ物ごろもも
これぞうあーし。松八絶日は此は後級物ろ事ろ是有情
の多獣此情の第本にさ四ぐの論氏立。平意人ろ此を
若ふうーしんの作ろ物ごうなまべ。色神乃ふ又ふ
曲言みて人弾とろて天地と作ろ天地と作て人神と作

ろ此はろ。則儒乃の内徳とあるとふする此術をけべし。
されでこそ之の神秘く生まるべ醫乃ふ志ふくしてあて
見まべく本まし。古此ふーこにひろまてろ法を出合揮さ
耐ぐ妄見ふ以て心とあーふまーふまーふまーふまーふまーふまく
神ふーして去狂の言此やをしる事これ者ひ此第一如ー。習
法をおこしろ此乃ぐく言ふさ事にも。者とろ以て第一
しにさ人八者の乃ふいふ物八。上ふ五ろ下士意人ふ
つろ。あやー此紙ふろ格の下を廣ろにてふすを金の
たごひまで一人ふ以まてふるひごろ此ふの也。丈五唐土あく
撰人ろ二十四者空やく又乃ふすべー。僕置能乃の廣ふ

中に二十四人までは孝行のものへ夫々に五十石ずつ
おくられ候ひしに付て今度三男忠なりひさ二万四千石を
こされ候。日本にて孝子傳と云ふ書物にてあるよく
読人知る所なり。又支那にも孝行の誉高き者と
聞てゞて世に流布しぬ。人倫の勝負を論ずるに
法ふつゝめて大切なるべきは父母にて。身體髪膚を授けられ
あひなる大恩なれば。しかるに薩摩浪士の輩
忘れをる。九國の義士も行なる。不孝なれば後世に
も恥辱なるべし。又忠義といふは君よりまのやうに仕へ
祿の厚薄にかゝはらず。忠節と称する

武家は法也。君の恩は父母は恩
てまつる恩のふかさ程ところ。去年にて百石千石は知行も三
人々人の扶持にて生命をたもち其上重定
よりなどゝ。候は忠義のものは武家乃者にて
えの御ありかゝりなるものまでも序なるに扶持すること。
扶人乃まんどゝきに礼智信の五つ。これを常とな
づけ人倫は扶乃ごくみて一つもかくいを用をすべし。
扶ゝ主殺師に仕ふ武は又戒とす。
教中法人は伝とゝなるこれ又人倫は第一これ二万
九千巻の經書七千餘巻は孝は義絶武は道絶ふ

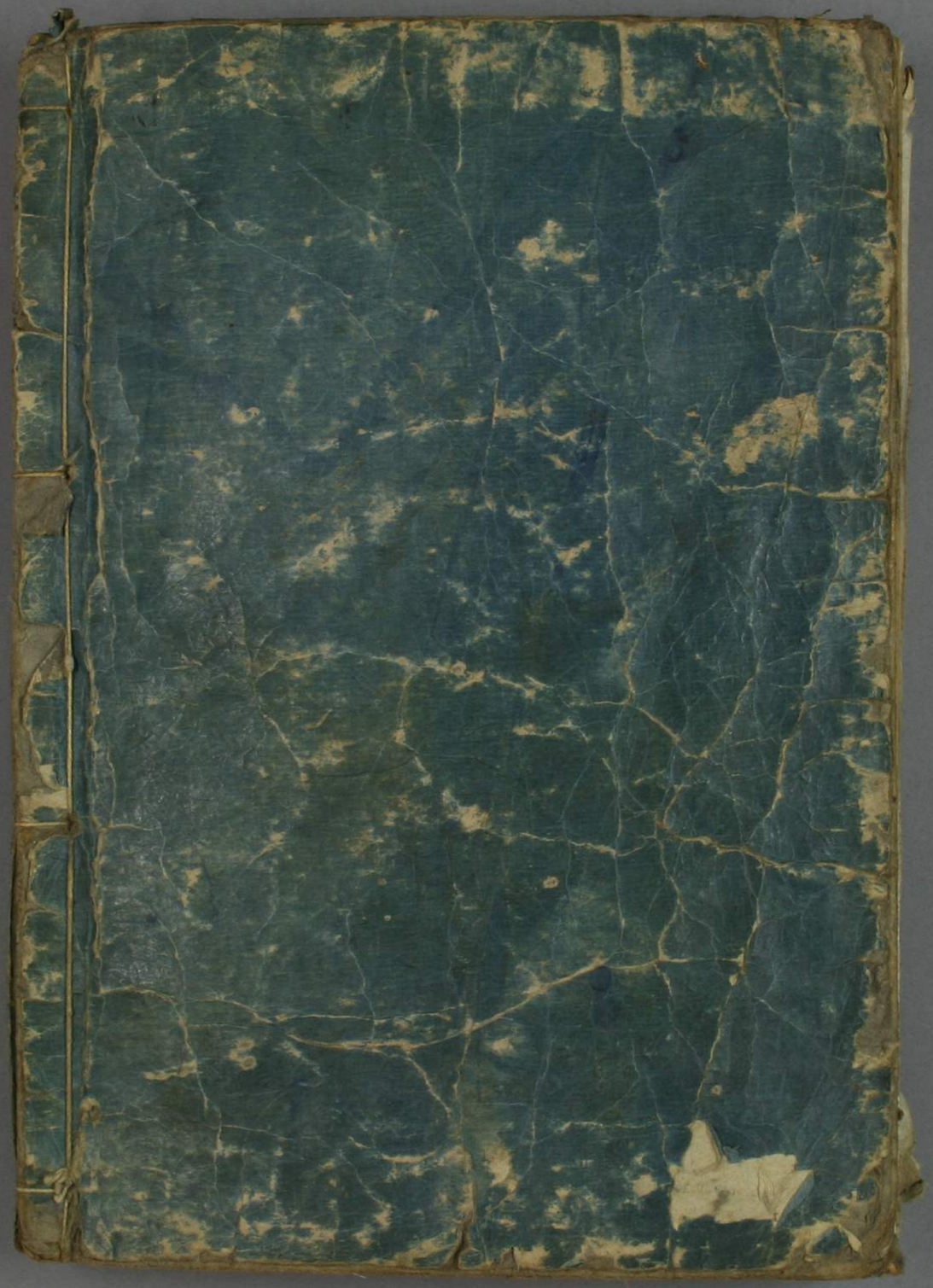
ことに信の一字を説たまへり。儒仏法の係りは方便とする所
神の係りは誠とするといへども。是は平生善悪よりにて品を
慎しむべき事勿論なり。まして心にいるゝとは神よりそなはる職
之 なる事也。親の家業をもつて主とする事身一代の職業
べし。所謂正直はまつすぐと訓じて。身と心の行ひに曲なく
なければこれ人は信としられぬ理にあらずや。桜花までも
其根ざしの直一本なるべし。幸此廟に詣ぬる此つゐで
なればに悪筆ながらもゆたかなる一書をあらはし
此書を入道にうつし神前にさゝげし。これを求めとる
人の志を喜びたまふべし。古丹波の国三つの浦浦嶋が子誌

宮城に参代経へく噂ん事を望みし時。郷の名所を土産
にせしはおけらく悔しき白髪と成りて七世の孫に逢ひ
とふるなり。こればかりでたき玉手箱を権現の加護を
手のせとまぬばおけてうましく披露ありぬ。されどいづれ正直を
もとゝして神まつる人のまもるべし。さればくと夕日影今まで
ありし廟を拝し。いづくともなく失ぬれば夜ごとを入り往
絶ず参詣なし仏の悦び深く家繁昌を願と目
ふつかぶく本あり立去り始終の事をと掲げる志心
をとるべし。なぐく神職を勤むべきよし竜宮しられば。
祖父祖母夫妃を始めし一族のよろこびあまりて悦び此玉酒盛。

伊勢屋志那売の風 全ア冊 出来

安永三甲午歳
正月吉日

日本橋通
江戸書林 前川六左衛門
仏教橋筋横町角

大坂書林 正本屋清兵衛
寺町通松原上ル町

京都書林 菅屋七郎兵衛